

情緒支援の抱える子どもの特性についてです

私がこの教育を始めたころ特殊教育でした。戦後まもなく昭和22年の学校教育法に定められた制度です。知的・情緒・肢体不自由等判別はあったものの、はじめは情緒障がいは大まかに同じという認識でした、今は多様化しているという認識でしょう。

情緒支援の要素は複雑で多岐にわたります。ここでは二つの要素を抜き出し説明します。これはSACSのチャートです。これをもとに要情緒支援の二つの要素について説明します。人がいろんな要素を持ちますが、この二つの要素が強すぎると人との活動がうまくいきません。それは「こだわり」と「多動」です。特にこだわりが強くなりすぎると「自閉症」という状態に、「多動」が強くなるとADHDの症状になる可能性があります。

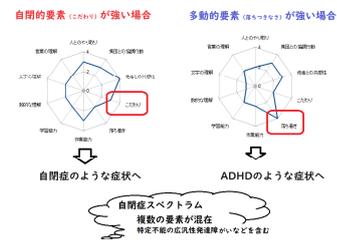
この二つの要素も含め複雑に入り混じるとしたのが自閉症スペクトラムと言われます。各要素は複雑に混在することもあるのですが、ここでは自閉要素の強い場合と多動要素の強い場合に分けて考えたいと思います。

通常、人は集団内でうまくいくように自分のことより他者や所属集団を慮って活動します。ですがこれらの要素の強い人は他者や集団より、自分の子の要素を重視します。例えば、多動要素の強い人は、集団の規則や迷惑より自分の興味関心を大事にします。それが徘徊、落ち着きのなさにつながります。

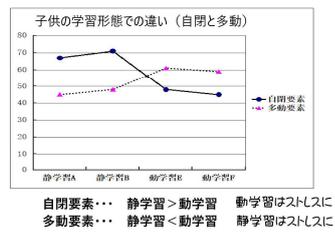
自閉要素の強い人は、集団の規則や他者の迷惑

## 特殊教育から特支教育

要情緒支援の子どもはより多岐にわたる認識支援を要する要素も多様である認識



<p><b>自閉的要素が強い</b></p> <p>自分のこだわり (self-focus) が優先</p> <p>こだわり &gt; 他者の利益や規則</p> <p>他者と上手くいかず支援が必要</p>	<p><b>多動的要素が強い</b></p> <p>自分の多様な関心が優先</p> <p>自分の関心 &gt; 他者の利益や規則</p> <p>他者と上手くいかず支援が必要</p>
--	--



より自分のこだわりを大事にします。これは自分のきまり・ルール、とも言えます。

たとえば「窓は開けておく」こだわりができたといいます。他の人の迷惑になっても、自分が寒くても「空けておく」ルール・こだわりを優先します。他者や集団の為より、自分の興味やこだわりを優先するので他者と上手に活動できず、修正も困難なので個別に支援が必要なのです。このような要支援の子供たちを一か所に集めて活動させれば万事上手くいくのか。いや、上手くいかない場面ができます。

グラフは自閉要素の強い子ども、と多動要素の強い子供です。

二つの要素の子どもが活動をした時のスコアです。静かに座らせた学習 = 静学習としました。定期的に場所と活動を変えた学習 = これは動学習としました。その比較のグラフです。

自閉要素の強い場合は 静学習の時スコアが伸び、動学習の時スコアが落ちます。また多動要素が強いときは静学習の時は飽きてスコアが落ち、動学習の時はスコアが伸びます。

スコアや学習の様子から考察すると、自閉要素の強い場合は動学習はストレスになり、多動要素の強い場合は静学習がストレスのなる可能性が高いです。

通級指導をした時、通常一人で指導をしていました。しかし学年の強い要望で多人数で学習活動することになりました。何度か行いましたが、上手くいきませんでした。それを学年に伝え多人数での学習を中断しました。

例えば自閉要素と多動要素二人の子どもがいたとしたら、動学習をしても静学習をしてもどちらかが停滞してしまいます。

その場合、誰かが不安定で学習規律が常時乱れた小集団となる危険性があります。

子どもの特性はモデルケースのようにいませ

通級学級で要情緒支援の子供多人数で学習  
⇒上手いかず

静学習が苦手  
動学習が苦手  
様々

学習規律の  
保持が難しい



複数で多学年在籍の情緒学級経営

教科担当もまとめるリーダーシップと  
豊富な個別支援の知識と経験が必要



力量ある人材を長期間かけ育成

ん。自閉要素、多動要素とあげましたが、他の要素の組み合わせで上手くいかない時もあります。各個性は条件や場面で変化して、単純なモデルケースのようにいきません。

そういう相性は更に存在します。私はこれ以上事例のデータを集め提示することができません。それらの課題提示は後進の研究に委ねます。

これを解決するために必要なのは、ひとつは特支学級担任の力量と経験でしょう。

リーダーシップが取れる基礎力量が高い教員を、長期間かけ育成する必要がありますが、その育成が進んでいるか、が解決の鍵になります。